

1

　都庁前のアスファルトに穿たれた巨大なクレーターの底から、蒸発する雨水の白煙を押し退けて、片腕を失ったムゲンドラモン三式の巨体がゆっくりと立ち上がった。
　右腕の超振動アームは根元から千切れ飛び、装甲の至る所から黒いオイルと火花が散っていた。
「…終わってねえぞ、クソガキども！外付けのおもちゃが壊れた程度で、俺の三式に勝ったつもりになるなよ…！」
　鼻血で汚れた口元を歪め、直人が憎悪に満ちた怒声を飛ばす。
　同時に、ムゲンドラモンの左肩の砲塔が旋回し、都庁前の広場を薙ぎ払うように高熱のエネルギー弾を乱射した。
「散れッ！ 正面で受けんな、都庁の中へ引っ張り込め!!」
　慎平がクロスローダーを振り抜きながら叫ぶ。
　爆風と熱線がアスファルトを削り取る中、勇太はパワードスーツの緊急ロックで固定した左膝の激痛を奥歯で噛み殺し、残された右脚とフェアリモンの風の推進力だけで路面を滑るように跳んだ。
　首筋と右肩から血を流すメタルティラノモンと、メタルエテモンが左右から牽制の打撃を浴びせ、ムゲンドラモンの進路を意図的に都庁第一本庁舎の崩壊した正面エントランスへと誘導していく。
「逃がすかよ、チョロチョロとォッ!!」
　挑発に乗った直人の指示で、ムゲンドラモンの数千トンの巨体がエントランスの砕けたガラス扉と柱を踏み潰し、広大な一階ロビーの吹き抜け空間へと強引に雪崩れ込んできた。
　それこそが、慎平が狙っていた罠の檻だった。
　先ほどの落下の衝撃と戦闘の余波によって、都庁内部の天井スラブは崩落し、むき出しになった無数の高圧送電ケーブル、エレベーターの鋼鉄ワイヤー、そしてひしゃげた鉄骨の束が、まるで巨大な蜘蛛の巣のように天井から垂れ下がっていた。
「今だ、風をぶつけろ勇太！ メタルエテモン、引っ張り上げろ!!」
　慎平の合図と共に、勇太がフェアリモンの脚から局所的なつむじ風を巻き起こし、
　垂れ下がっていた無数の高圧ケーブルと鋼鉄ワイヤーの束をムゲンドラモンの脚部と胴体へ向けて一気に吹き飛ばした。
　すかさずメタルエテモンが反対側の柱を蹴って跳躍し、ワイヤーの端を掴んでムゲンドラモンの左腕と首筋へ幾重にも絡め取っていく。
　巨体ゆえに狭い屋内での取り回しが利かないムゲンドラモンは、踏み出すたびに自ら崩落した鉄骨とケーブルの束に足を取られ、関節部にワイヤーが食い込んでその前進を完全に封じられた。
「チッ、小賢しい真似を！ なら、これで貴様らごと刻んでやる!!」
大型の本体が拘束されたと見るや、直人は躊躇なく次の手を切った。
　ムゲンドラモンの胸部装甲が左右に跳ね上がり、その格納庫から、紅い装甲を持つ全長2m の高速格闘形態―小型の龍人体が、拘束網をすり抜けて弾丸のように射出された。
　龍人体が飛び出した瞬間、ワイヤーに絡め取られた大型のムゲンドラモン本体の眼光がフッと消え、その意識と制御のすべてが小型の龍人体へと移行する。
　しかし、それこそが直人自身の命を守るための排他的なシステムであり、大型本体の防御が完全に無防備になる瞬間でもあった。
　射出された龍人体が、床を蹴って一直線に勇太の喉元へと襲いかかる。



2

　目に見えない壁に激突したかのようにと空中で硬直した。
　そのまま推進力を失った龍人体は、糸の切れた操り人形のように火花を散らしながらロビーの床へと墜落し、同時に、背後に聳える大型のムゲンドラモン本体の内部からもくぐもった小爆発音と黒煙が噴き上がった。
「…なっ!? なんだ、どうなってやがる!? 動け、ムゲンドラモン！ なぜ止まったァッ!!」
　ムゲンドラモンの肩の上で、直人が目を剥いて装甲を蹴りつけた。
　外部からの攻撃ではない。
　ムゲンドラモンの分厚い胸部装甲の内側隙間だらけの動力パイプの奥から、聞き覚えのある下品な笑い声と、無機質な放電音が響き渡っていた。
「ゲラゲラッ！ おっさん、外ばっかり気にしてお留守だぜーっ!!」
「オイラたちの特製ウイルスと電撃の味はどうだァッ!!」
　開いたままの胸部ハッチの隙間から顔を覗かせたのは、オイルまみれになったスカモンとジャンクモン、そしてバチバチと高圧電流を放つコクワモンの姿だった。彼らがナノモンから託されていた悪性ウイルスデータをムゲンドラモンのメイン制御回路へ直接ねじ込み、さらにコクワモンの局所放電で龍人体への神経接続を内側から完全に焼き切ったのだ。
「ば、馬鹿な…！ いつだ!? どこに、内部へ潜り込む隙なんかあった!! ??」
　直人の引き攣った怒声に、ロビーの柱の陰から歩み出た慎平が、猫背の肩をすくめて気だるげに答えた。
「…あんたが上空の衛星を落とされて、このデカブツがビルの真ん中でフリーズした時だよ」
　慎平はクロスローダーを軽く揺らしながら、冷めた目で直人を見上げた。
「メタルティラノモンがこいつをビルから突き落とす直前、千切れた右腕のソケットの隙間から、スカモンの軟体を使って中へ滑り込ませておいたんだ。
　プランとしてあったが現実的じゃねえから伝えるだけ伝えておいたが上手い事臨機応変に動いてくれてたみてえだな。
　そこから内部のロックを外して、ジャンクモンとコクワモンを引き入れる時間は十分にあった。
　…外付けの目と脳みそを失った途端に、自分の足元すら見えなくなる。結局、最後に油断して足元を掬われるのは、他人の力に胡坐をかいてる素人ってこった。
　メタルティラノモン!!!」



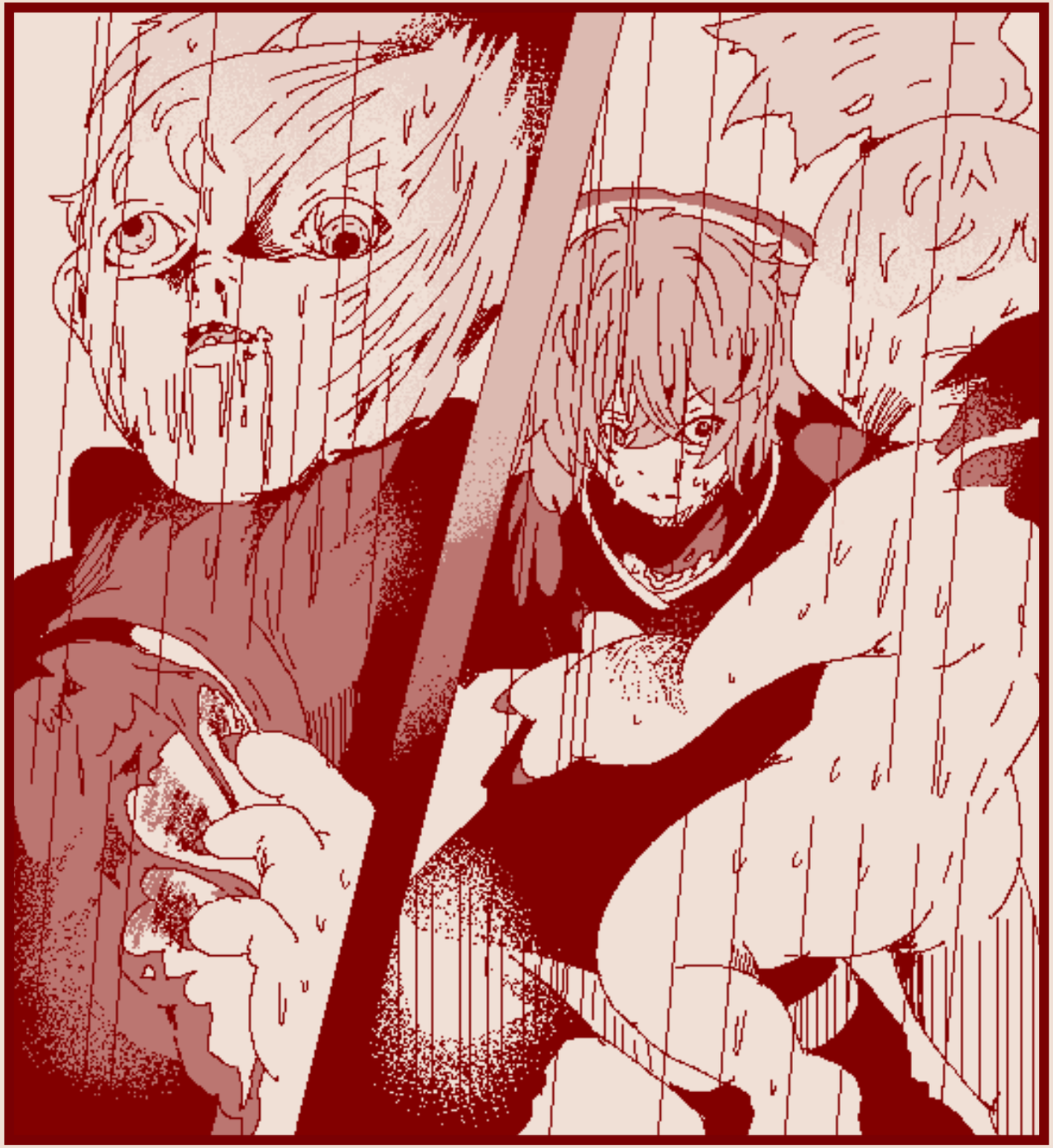
3

「言われなくてもやるぜェッ!!」
　満身創痍のメタルティラノモンが、最後の力を振り絞って床を蹴り、ワイヤーに絡まったムゲンドラモンの巨体へ正面から組みついた。
　超振動ブレードを備えたムゲンドラモンの左腕を自らの負傷した身体で強引に羽交い締めにし、残る片腕のクローを、内部からロックが解除された胸部装甲の隙間へとねじ込む。
　装甲がひしゃげる凄まじい金属音と共に、メタルティラノモンが渾身の膂力で胸部ハッチを左右へ無理やりこじ開けた。
　むき出しになった格納庫の最奥…複雑に絡み合うケーブルの中心で、赤黒く脈動するムゲンドラモンの巨大な電脳核が露わになる。
「勇太ァッ！ マッハモンを受け取れ!!…決めてこい!!!!」
　慎平がクロスローダーを高く掲げて叫んだ。
　メタルエテモンの身体が光の粒子となって分離し、飛び出したターゲットモンが内部のスカモンたちをワイヤーで一気に引き抜く。
　そしてもう片方の光の奔流…マッハモンの暴走するエンジンと車輪のデータが、駆け出した勇太のフェアリモンの脚へと真っ直ぐに収束した。
「「デジクロス!!」」
　かつてサンドリモンの防御を打ち破った時と同じ、風のスピリットと爆音の機械獣による合体。
　勇太の両脚に、黒と銀の巨大なエキゾーストパイプと装甲タイヤが装着され、ロビーの空気を焦がすほどの灼熱の排気炎が噴き上がった。
　砕けた左膝の激痛も、右上腕から噴き出す血の感覚も、暴走するエンジンの振動がすべて塗り潰していく。
「はあああああああああああああああああ!!」
　勇太の咆哮と共に、タイヤの回転と暴風の推進力が臨界点を超えた。
　床のタイルを粉々に踏み砕いて跳躍した勇太の小さな身体が、彗星となって一直線に宙を裂く。
　こじ開けられた胸部ハッチの奥、脈動するムゲンドラモン三式のコアのど真ん中へと、全質量と全速度を乗せた勇太の飛び蹴りが深々と突き刺さった。
　一拍の静寂の後、ムゲンドラモンの内部から凄まじい閃光と爆風が噴き上がった。内側からデジコアと動力炉を直接粉砕された鋼鉄の巨獣は、声なき断末魔のように全身の装甲を激しく痙攣させ、次の瞬間、背面からロビーの瓦礫の床へと大地を揺らして崩れ落ちた。



4

「ぐ…まだだ!!…まだ!!!…ま…。」
　渡辺が崩れ落ちたムゲンドラモンの間から芋虫のように這い出してきた先。
　勇太が静かに渡辺を見下ろしていた。
　静かに…だが、拳は震え先の戦闘で完璧に殺してきた感情が現れていた。
　ただ、渡辺はこれから先自身にやってくる痛み以上に少年に…誰からか見下ろされるその視線に敏感に反応した。
「…！ふざけんな!!!なんだその目は俺を…俺を見下すんじゃねえ!!!！」
　勇太はただ静かに息を整え、静かにただ問いかけた。
「お前は…なんであんな事ができるんだ？」
「はぁ？なんの事だよガキ…？」
「母さんや日花達にした事だよ!!!クズが!!!」
　今まで静かに…異常なまでに冷静に対応していた勇太の堰が切れた。
　12 歳の少年が完全に感情を殺せている訳がなかった。寧ろその心はもう表面張力ギリギリで保っているグラスのように他の感情が注ぎ込める容量がなかっただけであった。
　それが今ギリギリのところで揺らぎ始めた。
　渡辺はその揺らいだ一瞬を見過ごさなかった。
　左手の魔剣で勇太を切り裂こうと動かした。…しかし、勇太はそれを軽くいなし魔剣の剣先を叩き折った。
「…化け物が…うぐ！」
　勇太を睨み付けようとする渡辺の顔面を勇太は蹴り上げた。
　軽い脳震盪を起こした渡辺は意識を溶かしながら地面に這いつくばる。
「…本当に不快だよ。毎度…毎度、戦ってる時どんなにアドレナリンで昂ってても…相手を傷つける瞬間の肉の感触…骨の軋む音…、相手が傷いた時の顔に心がざわつく…どんなに憎いお前でも…!!
　なのに！なのに！なんで!!お前は何も感じないで!!!笑って母さん達や…！光を!!!傷つける事が出来たんだ!!!！」
「…は…ははそういう事かよガキ…!!なんだ…理解できてねえんだな!!はは!!」
「何を笑ってる…。」
「そりゃあ笑うだろ！何でそんな顔してるかと思えば!!!はは…なぁ小僧…いい事教えてやるよ…お前は俺だ。」
「あぁ…!?」
「てめぇだけじゃねえ…誰も同じだ…ただ…俺はお前らと違う。俺は、はは…お前らとは違ってひとりだけ先を行ってる。」
「もういい…黙れ…会話が噛み合わねえ。」
　終わらせるために動こうとした…まさにその瞬間だった。
　背後で完全に沈黙したはずのムゲンドラモンの残骸の奥底から、これまでとは全く異なる、ひどく冷たく規則的なビープ音が鳴り響いた。
　勇太の視線が、反射的にムゲンドラモンの残骸へと向く。
　ただひとり渡辺は、その電子音を聞いた瞬間に息を呑み、誰にも見えない角度で忌々しげに舌打ちをした。
(…チッ、三式の最終ファイルセーフが作動しやがったか。…
　アレを呼ぶしかねえか一度指示を出すと制御が利かねえから、本当は使いたくなかったんだがな…！)
　だが、今の渡辺にとって、自分を地面へ引きずり下ろした目の前の少年を絶望の底へ叩き落とせるのなら、手段など何でもよかった。再起動と変質が完了するまでの、ほんのわずかな時間を稼ぐだけでよかった。



5

渡辺が瓦礫の上から右手を掲げ、指をパチンと鳴らした。
その合図と同時だった。都庁ロビーの奥、暗く崩落したエレベーターホールと階段の闇の中から、「な、なんだこいつらァッ!!」というスカモン軍団の悲鳴がこだました。
直後、薄暗い瓦礫の隙間を縫って、十数体の小柄な影がロビーへと雪崩れ込んできた。
四足歩行に近い低い姿勢で床を蹴り、唸り声を上げながら勇太たちへと一斉に飛びかかってくる。
(小型の成長期デジモンの群れか!?)
ムゲンドラモンの再起動を警戒した勇太は、即座に反射的な迎撃行動を取った。
フェアリモンの脚を鋭く振り抜き、かまいたちを放って、先頭を跳んできた一体を胴体から袈裟懸けに切り裂く。
さらに、その背後から自分の喉元めがけて飛びかかってきた二体目の首筋を、使える左手で空中で鷲掴みにし、そのまま持ち上げて動きを封じた。
しかし…左手の中に伝わってきた感触に、勇太の思考が凍りついた。
何でも感じたデータの塊であるはずのデジモンの感触ではない。
温かく、柔らかく、そして異常なほど華奢な…人間の温度だった。
勇太が息を呑んで手の中の存在を凝視すると、そこには信じがたい異形があった。
小学校低学年にも満たない、小さな人間の子供の顔。だが、その左顔面の皮膚が変形するようにパタモンの橙色の大きな耳羽が生え、小さな左腕は人間の手ではなく、爪の生えたパタモンの太い前足へと無理やり置き換わっていたのだ。
「ガァッ、アァァァッ!!」首を掴まれたその異形の子供は、焦点の合わない白濁した瞳を剥き出しにし、パタモンの前足となった左手で勇太の左前腕を獣のように滅茶苦茶に引っ掻き回した。
「…な…っ、あ…!?」
爪が皮膚を裂く痛みよりも、目の前の現実が理解できず、勇太の左手から力が抜けて子供を床へと落としてしまった。
着地した子供は奇声を上げてすぐさま跳び退く。
震える瞳で足元を見た勇太の網膜に、先ほど自分が小型デジモンだと信じて疑わず、かまいたちで真っ二つに切り裂いた最初の一体の死体が映り込んだ。
デジタルデータとなって消滅してはいない。
大量の赤い人間の鮮血の海の中で、ガブモンの毛皮やアグモンの鱗が皮膚と癒着した、幼い人間の子供の亡骸が、内臓と血を撒き散らしてピクリとも動かずに転がっていた。
「…なんだよこれ…、っ渡辺!!!!」
勇太の気管がヒュッと狭まり、肺が空気を吸い込むことを拒絶した。
自分がやった。デジモンじゃない…自分のこの脚で、何の躊躇いもなく、人間の子供を切り殺した。
視界が急速に歪み、足元から地面が崩れ落ちていくような激しい眩暈と過呼吸が勇太を襲う。膝から力が抜け、血だまりの中に両手をついてへたり込んだ勇太の背後で、ゆっくりと立ち上がった渡辺が、心底愉快そうに喉を鳴らして笑い始めた。



6

「……アハハハハッ！ いい顔するじゃねえか、日野勇太ァッ!!」
　直人は血を拭いもせず、周囲を取り囲んで獣のように唸る十数体の「元・子供たち」を指差しながら、粘りつくような声で解説を始めた。
「そいつらはな、セラフィモン様の教団で進められていた『ブレンダー融合実験』の失敗作どもだよ！
　お前みたいにスピリットでデジモンの力を纏えるなら、最初から人間とデジモンのデータを直接融合させて、人間の醜悪な本能をデジモンの特性で綺麗に上書きできるんじゃねえかっていう、高尚な実験の産物さ！」
　直人は猫背の身体を揺らし、まるで不良品の在庫でも語るかのように軽薄に言葉を継いだ。
「価値観を上書きしやすいように、自我が芽生えたばかりで、ガキ特有の無邪気な残酷さを持った五歳から八歳までの子供ばかりを選りすぐって使ったんだが…まあ、見ての通りだ。人間の脳みそじゃ融合の負荷に耐えきれず、知能も心も全部壊れて、寿命もあと数日しかねえただの化け物に成り下がった。
　捨てるのも勿体ねえから、俺がセラフィモン様から貰い受けて、この都庁の番犬代わりに飼ってやってたんだよ！
　だがなぁ!!!確かに人間だよ!!こいつらはなぁ!!!！」
　吐き気が勇太の喉元までせり上がる。だが、直人はうずくまって震える勇太のすぐ前まで歩み寄ると、無防備なその顔面を革靴の爪先で思い切り蹴り上げた。
「ぐ、あ……っ！」
　勇太は防御すらできず、床のタイルの上を無様に転がる。直人はさらに歩み寄り、倒れた勇太の腹部と背中を何度も、何度も執拗に蹴りつけながら、腹を抱えて高笑いした。
「おいおい、どうしたんだよヒーロー様ァッ！ デジモンと人間ってだけじゃねえか!!!お前がこれまでも!!!今！も!!何も考えず切り裂いたように!!!」
　直人の革靴が勇太の肩を踏みつける。
「笑わせるんじゃねえよ、クソガキが！どうせお前は!!!ジャリの番組で見たヒーロー気取りでここまでやってきたんだろ!!!善人がいて！悪人がいて!!悪人には何をしてもいいってなぁ!!!そうじゃなきゃさっきみてえな言葉は出ねえだろう!!甘えんだよ!!!！」
　地面に少し空間を開け浮いた頭を思いっきり靴の底で叩きつけた。勇太の左目が丁度突起に当たり視力と意識を朦朧とさせた。
　動かなくなった　勇太を静かにだが心底楽しそうに渡辺は語り掛けた。
「お前は俺だ日野 勇太…いや、どいつもこいつも同じだな。
　皆傲慢なんだよ。本当は他人なんてどうでもいいのさ。だがてめえらモラルとかクソみてえなもんをかざして自分達を慰めてる。
　だがな…一皮剥けば薄汚え本性があるんだ。お前だってそうだろ？デジモン何十…何百の命を奪ってもなんも感じねえで人間ひとりふたり殺したくれえでこの騒ぎようだ…だのにモラルを俺様に説いてヒーロー気取り…なんであんな事ができる？そりゃあ他人なんてどうでもいいからに決まってるからだろ。
　俺はその事にずっと前から気付いてた…だけどてめえらはそんな俺を見下して爪弾きにしてきた。
　まさにお前の目はその目そのものだ。
　もう一度言うぜ…日野 勇太お前は俺だ。…ただなぁ俺は先に行ってる。だから俺は特別なんだ。」
　修復した振り上げられた渡辺の魔剣が、動けない勇太の脳天へと振り下ろされかけた。
　すんでのところで、メタルエテモンが横合いから飛び込み、強引に弾き飛ばした。
「勇太ァッ!! こんなクズ野郎の減らず口に付き合ってんじゃねえ、殺されるぞ!!」
　メタルエテモンの怒声に、茫然自失となっていた勇太の瞳にわずかな焦点が戻る。
　勇太は血を吐きながら立ち上がり、渡辺へ向けて踏み出そうとした。だが、その進路を塞ぐように、パタモンやピヨモン、ガブモンの部位を癒着させられた十数体の子供たちが、涎を垂らして勇太へと飛びかかってくる。
「…っ！」
　攻撃できない。…勇太は初めて敵に背を向け、群がる異形の子供たちを傷つけまいと、逃げるようにして直人たちの前から後退し始めた。
　子供たちの群れもまた、逃げる獲物を追う本能だけで勇太へと殺到していく。



7

その時、ムゲンドラモンの残骸が、耳障りな金属の軋み音と共に再び身を起こした。
爆発と左目のセンサーは完全に抉れ、左腕のブレードも、背面の二基のムゲンキャノンも、そして下半身の脚部構造すら大破して千切れ飛んでいる。
にもかかわらず、半壊した上半身だけの鋼鉄の亡骸が、残されたパーツと装甲の突起で床のコンクリートをガリガリと引っ掻き、ゾンビのように這いつくばりながら、慎平たちのいる一角へと猛烈な勢いで這い進み始めたのだ。
「なっ…まだ動くのかよ、あの化け物!!」
慎平の顔が引き攣る。すぐ後ろには、先ほどの落下攻撃で右肩を抉られ、自力では一歩も動けない重傷のメタルティラノモンが倒れ込んでいる。
彼を見捨てて逃げることは、慎平には絶対にできな買った。
しかも、勇太を追っていた実験体の子供たちの半数が、暴走するムゲンドラモンの動力音に反応して巨体へと絡みつき、その周囲で無差別に暴れ始めた。
渡辺は「邪魔だ、不良品どもが！」と自分の飼っていた実験体ごと魔剣と衝撃波で薙ぎ払いながら、ムゲンドラモンを慎平たちへとけしかける。
「慎平さん!!!！」
離れた柱の近くでそれを見た勇太が、救援へ駆けつけようと足を踏み出した。
だが、残りの七、八体の異形化した子供たちが、一斉に勇太の脚と腰へと飛びつき、負傷したその身体を床へと押し倒した。
小さな爪と牙が、勇太のパワードスーツと皮膚に食い込む。
もみ合いになりながら、必死に彼らを振り払おうとした勇太の耳元に――獣の唸り声に混じって、ひどく掠れた、か細い「人間の声」が確かに届いた。
「……た、す……け、て……」「……い、たい……よぉ。」
「……っ、ころ、して……」
白濁した瞳の奥から、血の混じった涙を一筋だけ流しながら、デジモンの前足で自分の首を掻き毟ろうとする幼い少女の顔。
勇太の心臓が、氷の塊で殴られたように凍りついた。
顔を上げれば、這い進むムゲンドラモンの巨大な顎と超振動の残骸が、メタルティラノモンを庇って立つ慎平とメタルエテモンの目前――あと数メートルの距離まで迫っている。
自分を押さえつけているこの子供たちを退かさなければ、あと数秒で慎平たちが引き裂かれて死ぬ。
今ここで力を使えば、助けを求めているこの幼い命を、自分の手で全員殺すことになる。
「はぁ…はぁ…！はぁ…あ…あああああ!!!!!」
思考が焼き切れ、勇太の心の中で何かが音を立てて崩れ落ちていく。
ムゲンドラモンの鋼鉄の顎が、ついに慎平の頭上へと振り上げられた、その極限の刹那だった。
「――ッ、あああああああああああああああああああっ!!」
人間の言葉ではない、獣の様な絶叫が勇太の喉から迸った。
勇太のフェアリモンの脚から、全方位へ向けて暴虐なまでの真空のかまいたちが爆発的に解き放たれた。
勇太に組みついていた異形の子供たち、そしてムゲンドラモンの足元に絡みついていた子供たちの小さな身体が、赤い血飛沫を上げて一斉に切り裂かれ、床へと崩れ落ちていく。
誰一人としてデータには還らない。温かい血の匂いと、小さな亡骸の山だけが、ロビーの床を赤黒く染め上げた。
「俺が止める…！だから逃げろ!!!！」
勇太はただ叫んだ。
それを歓喜に顔を歪めて高笑いする直人の声を聞きながら、勇太は血の海の中で立ち上がった。
慎平が「勇太…！」と声をかけようとしたが、今の勇太の耳には届かない。
瞳孔が開ききり、壊れた機械のように叫び声を上げながら、勇太は血塗れの脚でムゲンドラモンの残骸へと真っ直ぐに突っ込んだ。



8

その瞬間…。
轟音と共に、都庁のロビーを赤い閃光が埋め尽くした。
千切れ飛んでいたはずの脚部が、より分厚く巨大な深紅の重装甲となって再生し、失われた両腕には暴虐な爪と破砕機構が、そして背面にはムゲンキャノンを遥かに凌駕する二門の超巨大砲塔が瞬時に形成される。
機械の集合体であったムゲンドラモンが、より高密度で完全な『カオスドラモン』へと変化を遂げたことで、内部に侵入していたウイルスも回路の損傷もすべて完全に消去・克服されていた。
カオスドラモンが咆哮なき咆哮を上げ、その全身に設けられた無数の砲門と背面の超巨大砲から、全方位へ向けて極大の破壊レーザー『ハイパー・ムゲンキャノン』が同時照射された。
回避も防御も成立しない、圧倒的な暴力の奔流。
照射された深紅の奔流が、都庁第一本庁舎のロビーの柱と壁面を紙屑のように蒸発させ、吹き抜けの天井を何階層もまとめて貫通して新宿の雨空へと突き抜けた。
「ぐ、わあああああああっ!?」
衝撃波と熱線に巻き込まれ、メタルエテモンが合体を強制解除されてターゲットモンとマッハモンへと分離しながら吹き飛ばされる。メタルティラノモンも、スカモンたちも、瓦礫ごと壁面へと叩きつけられて完全に戦闘不能へと陥った。
爆風の中で投げ出された慎平が、砕けたコンクリートの床へと転がり落ちる。
その無防備な慎平の背中めがけて、カオスドラモンの砲門から追撃の極太レーザーが真っ直ぐに放たれた。
「慎平、さんッ!!」
爆煙の中から、片膝を引きずった勇太が風を噴射して飛び出し、慎平の身体を背後から突き飛ばして自らがその射線上へと割り込んだ。
直後深紅の光の槍が、勇太の小さな身体を正面から撃ち抜いた。
肉と装甲が焼ける音が響く。
レーザーは勇太の右胸を背中まで完全に貫通し、向こう側の風景が透けて見えるほどの風穴を穿った。
同時に、勇太が胸の前で盾にするように左手で握りしめていた、あのひび割れたD-3が直撃のエネルギーを受け止めきれず、乾いた音を立てて木っ端微塵に砕け散った。
ヴォーボモンと自分を繋いでいた唯一の証であり、風の力を支えていたデジヴァイスの破片が、キラキラと赤い光を反射しながら、勇太の胸から噴き出した鮮血と一緒に雨の吹き込む床へと散らばっていく。



9

「……ゆ、勇太…!!!!」

突き飛ばされて助かったが慎平の絶叫が、崩落する都庁の轟音にかき消される。

D-3 が砕け散ったことで、勇太の両脚を包んでいたフェアリモンの装甲が消え始めていた。

右上腕は貫かれ、左膝は砕かれ、そして右胸に致命的な風穴を穿たれた 12 歳の少年の身体は、糸の切れた人形のように床へと崩れ落ち、自分の流した血の海の中でピクリとも動けなくなった。

周囲では、ターゲットモンも、マッハモンも、ジャンクモンも、そして慎平自身も、カオスドラモンの一斉照射の余波で全身を焼かれて倒れ伏し、指一本動かすことすらままならない。

立ち昇る黒煙と、降り注ぐ瓦礫の粉塵の中。

深紅の巨獣カオスドラモンの足元へふわりと降り立った渡辺直人が、ダスクモンの魔剣の腹を自らの舌でねっとりと舐め上げながら、血だまりに沈む勇太の元へとゆっくりと歩み寄ってきた。

暗い瞳が、獲物の息の根を完全に止める瞬間の嗜虐的な喜びにギラついている。雨と血に濡れた新宿の都庁で、すべてが絶望の闇へと呑み込まれようとしていた。



18

都庁から少し離れた新宿の摩天楼の上空…崩壊した TEZ 東京教会ビルの跡地を見下ろす空域では、もう一つの絶望的な戦いが最終局面に達していた。

「おおおおおおっ!! バーニングエンド!!」

電脳犯罪捜査課のベテラン刑事・竜崎 大吾の咆哮に呼応し、満身創痍の究極体ダイナモンが、全身の炎と竜の闘気を左拳の一点に凝縮して天へと跳躍した。

大気を焦がす灼熱の拳が、十枚の黄金の翼を広げて中空に佇む最高位の熾天使セラフィモンの胸元へと真っ直ぐに突き刺さる。

だが…セラフィモンは羽ばたき一つ変えることなく、白銀の手甲に包まれた片手を静かに前へと差し出した。

鈍い衝撃音が響き、周囲の雨雲が円形に吹き飛ぶ。しかし、街一つを灰に変えるはずのダイナモンの渾身の左拳は、セラフィモンの開かれた掌ひとつによって、まるで赤子の手でもあしらうかのように完全に受け止められていた。

「…無駄な足掻きだ。お前たちの闘争本能そのものが、この世界を摩耗させるノイズに過ぎない。」

仮面の下から響くセラフィモンの無機質で荘厳な声と共に、その片手が軽く振られた。

ただそれだけの動作で、空間そのものが爆縮したかのような純白の衝撃波が解き放たれる。

「ぐ、おおおおおおおおっ!?」

ダイナモンの巨体が砲弾のように真下へと叩き落とされ、途中にあった高層雑居ビルの外壁を三棟続けてぶち抜きながら、地上のアスファルトへと仰向けに激突した。

轟音と共に巻き込まれたビル群が次々と連鎖倒壊を起こし、巨大な瓦礫と粉塵の津波が街路を埋め尽くす。

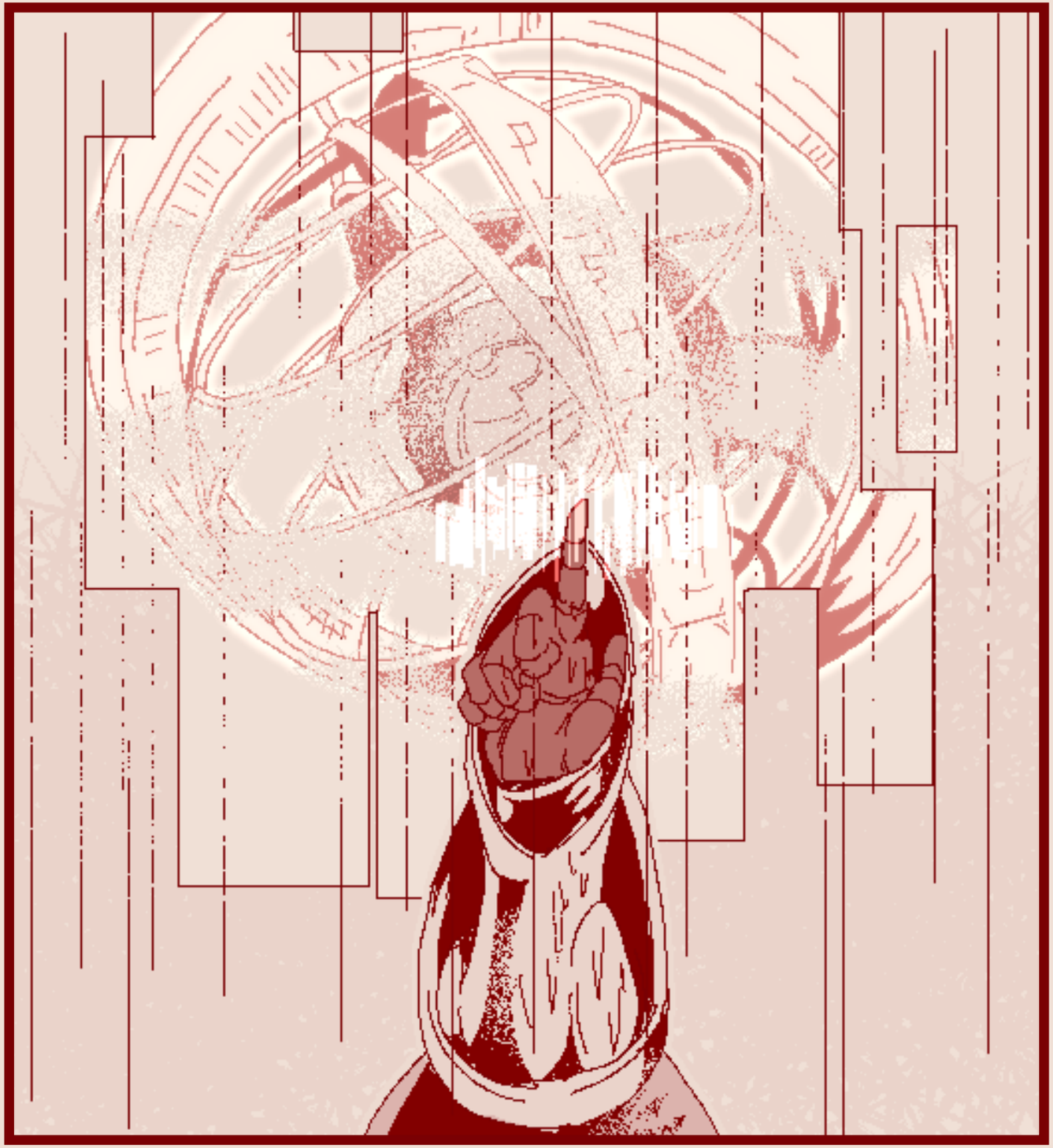
煙が晴れた瓦礫の山の中で、倒れ伏したダイナモンのすぐ横に立つ竜崎と、笠水紋十郎が、血と煤に汚れた顔で上空の熾天使を見上げていた。

紋十郎の足元では、彼と共にセラフィモンへ食い下がっていた三体の究極体メタルガルルモン（X 抗体）、クーレスガルルモン、ズィードガルルモンが、すでに限界を超えるダメージを負って進化を維持できなくなり、傷だらけの三匹のガブモンへと退化して荒い息を吐いている。

少し離れた瓦礫の陰では、アヌビモンが重傷を負って意識の朦朧としたパートナーのデジマルを腕に抱え、辛うじて膝をついて耐えていたが、もはや再び立ち上がって戦うだけの体力は誰一人として残されていなかった。

地上の敗北者たちを見下ろしたセラフィモンは、黄金の翼を静かに揺らし、誰に聞かせるでもなく呟いた。

「…仕方あるまい。そろそろ、頃合いだな」



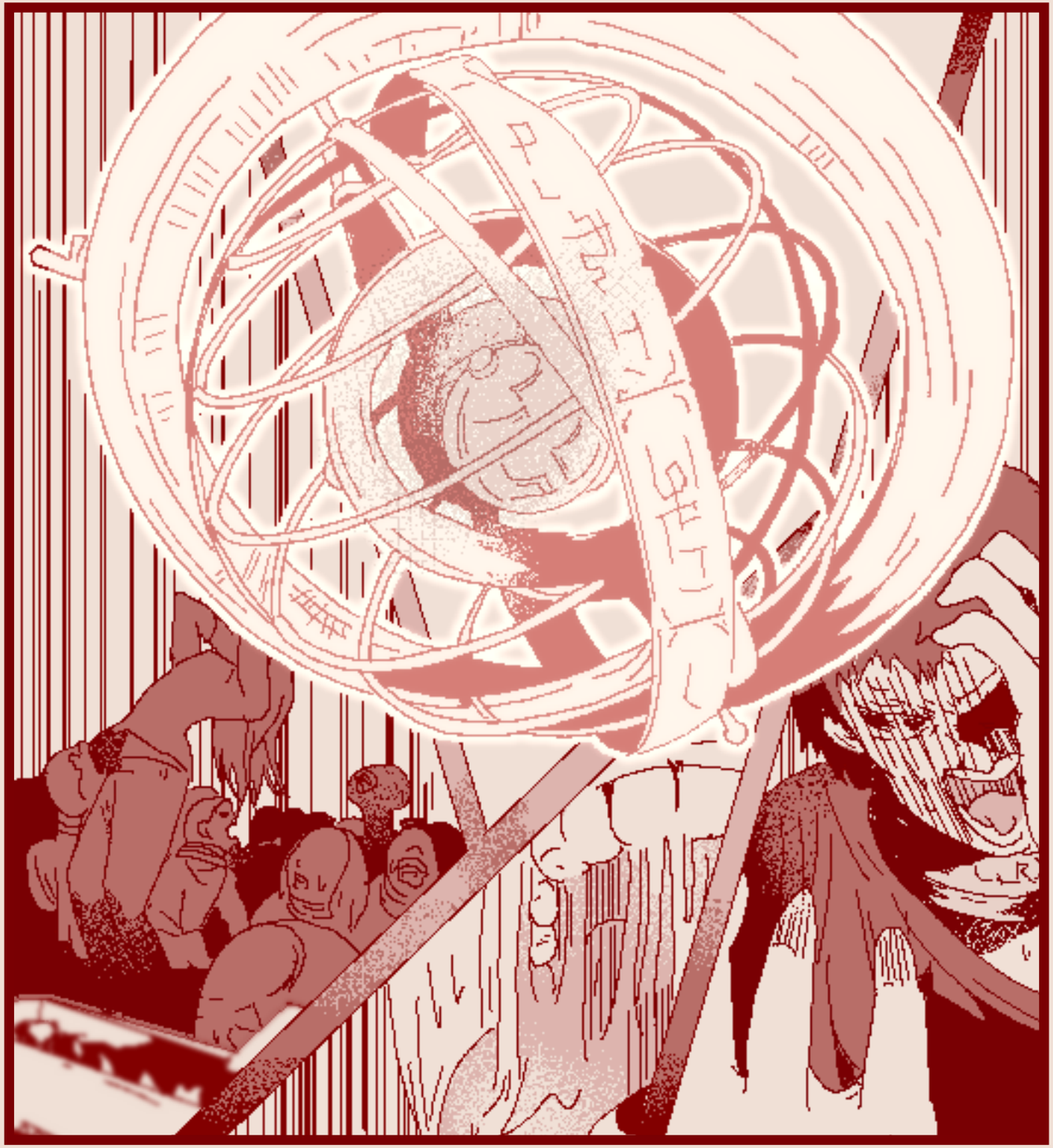
11

　セラフィモンの視線が、はるか西側――黒煙の立ち昇る東京都庁の方角へと向けられた。
（カオスドラモンまで出したか…ゲートはすでに閉じ始させているが…だが、万が一にも渡辺 直人が敗れるようなことがあれば、あの少年が閉ざされる寸前のゲートへ飛び込み、再びシオンへと介入するか。）
　セラフィモンは再び視線を眼下の竜崎たちへと戻し、一切の感情を交えずに告げた。
「本来であれば、この封鎖された日本にもう少し恐怖と混乱を熟成させ、人間どもが自らの意志で自然にすべてのコンセクレイションリングが完成するのを待つ予定だったが…状況がそれを許さないのなら、今ここで強制的に事を起こすまでだ。」
　セラフィモンが左手を静かに持ち上げ、人差し指を虚空へ向けて真っ直ぐにかざした。
　その瞬間、セラフィモンの背後の空間がガラスのようにひび割れ、部分的かつ巨大なデジタルゲートが強制的にこじ開けられた。
　眩い光の裂け目の奥…高次元の空間に浮かび上がった異様な構造物を見て、地上の紋十郎がハッと息を呑んだ。
　そこに鎮座していたのは、幾重もの黄金のリングが複雑な軌道で回転し、無数の光のデータ繊維を地上へと張り巡らせている、巨大な黄金の渾天儀のようなものだった。
「…あれは……っ！」
　紋十郎の脳裏で、これまでバラバラだったパズルのピースが一気に繋がった。
（そういうことか…！ 勇太をデジタルワールドへ戻すのを極端に嫌がり、俺たち電捜課や烏藤たちをシオンから現実世界へ強制退去させたのも…シオンにあるアレに誰も近づけさせないためか。
　…報告でデジタルワールドのコンセクレイションリングは制御塔があったと聞いて TEZ かセラフィモン自身と踏んでたが…アレが一括管理してるマザーコンピューターか!!）
　ゲートの奥の黄金の渾天儀がと鼓膜と脳髄を直接揺さぶる強烈なアポカリプスサウンドを共鳴させ始めた。
　その音波が新宿の空から地上へと降り注いだ瞬間、紋十郎、竜崎、そして退化したガブモンたちの首元に、かつて TEZ の地下で現れかけていた半形成の白いコンセクレイションリングが再び強制的に浮かび上がり音を立てて完全な円環へと再構築され始めたのだ。
「ぐ、うあああああっ!?」
「がっ、あ…っ、頭が、割れる…!!」
　神経系と脳のシナプスへ直接光の楔を打ち込まれるような激痛に、紋十郎と竜崎が膝を折り、ガブモンたちも喉を掻き毟って路面に転がり回る。
苦悶に喘ぐ彼らを見下ろし、セラフィモンは慈悲深き神のような声で淡々と言い放った。
「未完成のリングを外部からの強制出力で一気に結合させる以上、多少の神経の痛みは伴う。だが、すぐに苦しみも迷いも消え去るだろう。…人類が抱え込んできた愚かな原罪を償い、楽園へ至るためのわずかな代償だと思えばいい。」



12

「……ぐ、う……っ、はぁ、はぁ…！」
　首筋に食い込む白い光の輪の激痛に脂汗を流しながら竜崎と、後方のアヌビモンへと視線を走らせた。
「…おい、竜崎、アヌビモン…。まだ、動けるか…？ていうか竜崎おめえ平気そうだな?!」
　笠水の絞り出すような問いに、竜崎はダイナモンの傷ついた装甲を見て呟いた
「…無理です、紋十郎さん。ダイナモンは完全に気絶してます。
　じきに進化も解けるでしょう。」
「…こちらも、同じだ……」
　デジマルを抱えるアヌビモンもまた、首元に浮かび上がった白いリングの干渉を受けてデータの輪郭を激しく乱しながら、苦渋に満ちた低い声で応じた。
「デジマルの意識が戻らない上に、私のデジソウルも底を突いた…。
　暫く回復しないとあの高みにいるセラフィモンまで跳び上がることは、もはや不可能だ…。」
　味方は全滅。通信もノイズに塗れ、頼みの綱である都庁の勇太たちとの連絡も途絶えたまま、頭上では人類の自由意志を終わらせる黄金の機械が回転速度を上げている。
　紋十郎は濡れたアスファルトを見つめ、肺の奥から絞り出すように長いため息を吐き出した。
「…ハッ。くそが…。ガキどもに格好つけてここまで来て、手詰まりってかよ…。」



13

　ゲートの奥で回転する黄金の渾天儀から放たれるアポカリプスサウンドが、都市のビル群の窓ガラスを一斉に粉砕するほどの最大出力へと達した。
　それと同時に、渾天儀の中心核から目が眩むような純白と黄金のデジタルウェーブが放射され、新宿の空を越え、日本列島を囲む結晶壁の内側全域へと光速で伝播していく。
　それは、厚生省の健康支援アプリ『サポタマ』をインストールしていたすべての人間の端末と生体データへ向けた、一斉強制起動の号令だった。
　渋谷の地下街で身を寄せ合っていた避難民たちの首元に。
　名古屋の病院で負傷者の手当てをしていた医師や看護師の首元に。
　大阪や福岡の自宅で、震えながらテレビのニュースを見つめていた家族連れや老人、子供たちの首元に。
　日本全国、津々浦々の街角で、何千万という人々の首に一斉に白い光の首輪が出現し、その神経系へと強制的に食い込んでいった。
「ぎゃあああああああああっ!?」
「あ、頭が…っ、熱い、痛い、助けてえええええっ!!」
　列島のあらゆる都市、あらゆる避難所から、空を裂くような幾千万の絶叫と悲鳴が同時に噴き上がった。車を運転していた者が意識を失って建物へ突っ込み、苦痛に狂った人々が路上で折り重なるように倒れ伏す。
　わずか数十秒の強制構築の嵐が吹き荒れた瞬間―日本の全人口の実に八割にあたる人々の首元で、白い『コンセクレイションリング』が冷たい光を放って完成を迎えようとしていた。まさにこの世の地獄絵図だった。



14

その時だった。
黄金の渾天儀を背に、地上を見下ろしていたセラフィモンの背後…誰も侵入できるはずのない高空の死角から、空間の座標そのものを書き換えるような深緑と黄金の魔方陣が突如として展開された。
そこから飛び出した獣の耳を持つ影が、一切の予備動作もなくセラフィモンの後頭部めがけて、世界の理を捻じ曲げる高密度の魔力弾をゼロ距離で叩き込んだのだ。
「――!?」
セラフィモンも、カーネルの秘術に直結するその奇襲にわずかに体勢を崩した。そして、セラフィモンの意識が背後の襲撃者へと向いたそのコンマ数秒の隙を、地上の瓦礫の陰に潜んでいた人間の牙が逃さなかった。
雨音を切り裂いて、大口径の対物ライフルの乾いた銃声が二発、ほぼ同時に轟いた。放たれた対デジモン用の特殊徹甲弾は、セラフィモン自身の強固な装甲ではなく、セラフィモンが右手の指先で形成・維持していた渾天儀とのインターフェースの一点だけを、針の穴を通すような精度で正確に撃ち抜いた。
ガラス質の火花が散り、セラフィモンの手元の制御コードが砕け散る。
直後、背後のゲートがバチバチッと激しいノイズを上げて強制的に閉じられ、黄金の渾天儀との接続が物理的に遮断された。日本全土を覆っていたアポカリプスサウンドと強制構築の激痛が、まるで電源を落とされたかのようにピタリと止まる。
「小賢しい真似を」
セラフィモンが振り向きざまに黄金の腕を振るい、背後から奇襲を仕掛けた影を全力の衝撃波で地上へと殴り飛ばした。
地上数百メートルの高度から垂直に叩き落とされたその影は、竜崎と笠水のすぐ前方十数メートルのアスファルトへと凄まじい勢いで激突し、巨大な土煙を巻き上げた。しかし、煙の中からゆっくりと立ち上がった人物の姿を見て、竜崎と紋十郎は我が目を疑った。
「デジヴァイスを使ってください。デジヴァイスの聖なる力ならコンセクレイションリングの侵食を今なら止められはずです」
そこに立っていたのは、デジモンではなく、破れた防衛省の制服とコートを身に纏った一人の人間の女性…防衛省情報本部電波情報部の安所だった。
整った人間の女性の顔に、いつもの皮肉げで冷静な笑みが浮かぶ。
そして彼女が前を向き直り、セラフィモンへ向かって一歩を踏み出した瞬間――。
乾いた音を立てて、安所の「人間の女性としての外皮（擬態データ）」が、足元から光の破片となって一斉に剥がれ落ちていった。
黒い髪とスーツが解け、その内側から現れたのは、人間ではなく、かつてケルビモンと並び称された最高位の座天使にして、獣の耳と黄金の装飾、そして十枚の翼を併せ持つ神秘の究極体――『ラジエルモン』の真の姿だった。



15

直後、天から舞い降りたセラフィモンが、ラジエルモンたちの前方へと重苦しい威圧感を放ちながら降り立った。
同時に、周囲の崩れたビルの陰から、特殊装備に身を包んだ数十名の自衛隊員たちが一斉に飛び出し、安所を背に庇うように展開して、セラフィモンへ向けて小銃と重火器の銃口を揃え、激しい牽制射撃を開始した。
自衛隊員たちの放つ銃弾の雨がセラフィモンの周囲の空間で弾かれる中、後方の竜崎は呆然と安所の背中を見つめていた。

「…三大天使クラスの、デジモン…。」
紋十郎が驚愕に目を見開く中、姿を現したラジエルモンは、前方で銃を撃ち続ける部下の自衛隊員たちへ向けて、安所の時と変わらない凛とした声で指示を飛ばした。
「総員、射撃を止めなさい！ あなたたちの武器ではこれ以上彼の障壁は抜けません！ 今すぐ電捜課の竜崎さんたち負傷者を回収し、第二防衛ラインまで後退を！」
「はっ！」
自衛隊員たちは、自分たちの隊長が巨大な天使型デジモンへと変貌した姿を見ても、誰一人として動揺したり銃口を向けたりしなかった。彼女が何者であるかを知った上で、あるいは共に戦う上官として、最初から全幅の信頼を寄せていたのだ。
竜崎と紋十郎に肩を貸して撤退していく隊員の一人が、前へと歩み出るラジエルモンの横をすれ違いざま、ヘルメットの下から真剣な目で声をかけた。
「―隊長！ …安所さんも、どうかお気をつけて!!」
デジモンの名ではなく、人間としての『安所』の名で自分を案じた部下の言葉に、ラジエルモンの獣の耳がわずかに揺れ、その瞳が一瞬だけ大きく見開かれた。
やがて彼女の口元に、人間と過ごした日々を肯定するような、ひどく柔らかく温かい微笑みが浮かんだ。
「…ええ。ありがとう、必ず戻ります」



16

　自衛隊員たちが竜崎たちを連れて安全圏へと退避していくのを見届け、ラジエルモンは十枚の翼を大きく広げてセラフィモンの正面へと立ち塞がった。
　かつてカーネルのすべてを見通す力を持ちながら、セラフィモンとオファニモンの罠によってシオンを追われ、長きにわたり現実世界の闇に身を潜めてきたもう一人の最高位天使。

　対峙するセラフィモンは、黄金の仮面の奥から冷徹な視線をラジエルモンへと向け、低く荘厳な声で問いかけた。
「…やはり生きていましたか、ラジエルモン。
　あの時、カーネルの狭間で消し去ったと思っていましたが、人間の皮を被って地上の泥水を啜っていたとは。」
　セラフィモンの周囲に、大気を震わせる聖なる光の球体がいくつも浮かび上がる。
「だが、今までネズミのようにコソコソと隠れ潜んでいた貴方が、なぜ今さら私の前に姿を現したのですか？
　制御装置を一つ壊したところで、時間の問題に過ぎない。今の短時間でも日本の八割の人間にはすでにリング制御下。
　…貴方の千里眼でも見えているでしょう？都庁の少年もじきに消える。
　もう、すべては終わるというのに」

　圧倒的な覇気を放つセラフィモンを前にしても、ラジエルモンは一歩も退かなかった。
　その黄金の瞳には、かつて自分が遠くから見守り、慎平たちへ力を託して送り出した、あの傷だらけで真っ直ぐな 12 歳の少年の姿が鮮明に焼き付いていた。
「いいえ、終わりませんよ、セラフィモン。」
　ラジエルモンは両腕の魔導器を静かに構え、すべての知識を統べる者の確信を込めて、目の前の独裁者へと宣言した。
「彼が…ケルビモンが託した選ばれし子供の一翼…日野 勇太は、あの諦めの悪いお人好しと同じで自らの選択で未来をこじ開け、すべてをやり遂げます。
　…この現実世界で、彼と直接触れ合い、その目を見た私が確信したのです」
深緑と黄金の魔力が、雨の新宿の空を裂いて渦を巻く。
「彼が再び立ち上がり、あの門を潜り貴方達の企てを壊します。
　…そのために、今度こそ、私がここであなたを止めます…！」